られるに至つて、國民政府は全く地方政權に墮し、其政府機關を擧げて重慶に移し、以て依然として抗日聲明を行つては表面を糊塗する有樣であつた。されば重慶政權内部には早くから和平論者も現はれ内面的に相剋摩擦を演じつゝあつたが、四月二日六全大會に於て蔣は國民黨總裁に選ばれ、抗戰陣營の結束に、内部相剋を極度に蔭蔽してゐた。

然るに蔣介石と所見を異にする副總裁汪兆銘は和平問題に就て蔣介石と屢次に亘る激論を闘はしたが、蔣の反省するところとならなかつたので、十二月十八日突如飛行機で重慶を脱出、昆明を經て二十日佛印の河内へ飛び込んでしまつた。而して二十八日には河内から蔣介石及び重慶政府に對し和平建議の第一聲明を發したのである。

「備考」　十一月二日帝國政府は支那事變に關する不動の方針を聲明す。十八日對支中央機關として興亞院を設立に決し、十二月十六日事務所を開設す。十二月二十二日、近衛首相の所謂近衛聲明を發表して善隣友好、共同防共經濟提携の三原則を闡明す。二十八日汪兆銘の和平聲明は將に近衛聲明に相呼應せるものである。

昭和十四年　近衛首相は支那事變は長期建設の新段階に對處するため擧國一致内閣結成の要ありとの理由を以て挂冠し、一月五日平沼騏一郎男後繼内閣を組織す。また皇軍は二月十日、海南島を占領す。一方河内に雌伏中の汪兆銘は曩に重慶五中全會に於て、黨籍褫奪を決したのに對し抗議を申出で、一月重ねて和平唱道の所見を披瀝し、密かに實行方法を考究中であつたが、三月二十日その隱れ家に暴漢四名襲撃、曾仲鳴夫妻他二名に重傷を負はせたが、曾仲鳴は翌二十一日絶命した、此事件に刺戟された汪兆銘は愈々蹶起の覺悟を定め、三月三十一日第三次聲明を發表して、蔣介石の矛盾を痛烈に批難し、河内より上海への潜行を企てたのである。

四月二十日市長張仁蠡を中心とする武漢特別市政府が成立した。また中支占領地域内の幣制問題解決の前提として五月十日より上海に華興商業銀行の新設を見たり、占領地域内の政治經濟事情整備は着々進行した。

然るところ五月十九日汪兆銘重ねての聲明に於て重慶内に共產黨の跋扈して來た事實を暴露したので、重慶國防最高委員會は六月八日「汪兆銘逮捕處罰令」を公布したが、之れに對して汪兆銘は六月十二日「抗戰の眞相」と題する第六次聲明を香港の海南日報に發表し、更に七月十日上海に復刊した中華日報第一號に「予の日支關係に對する根本觀念及び前進目標」と題する一文を以て孫文の大亞細亞主義に立脚し、共產黨を徹底的に排撃し、速かに日本と和すべしと堂々宣言し、且つ某所よりマイクを通じて全支那民衆へ憂國の熱情を放送し、翌十一日の同紙上には「海外同胞に警告す」と題して華僑に呼びかける一文を公けにし、斯くて蔣介石との絶縁聲明を中外に公表したわけである。

汪兆銘が此決意を以て和平運動に乘り出したのは、六月初旬より中旬に亘り密かに日本に渡來し、時の樞密院議長近衛文麿、總理大臣平沼騏一郎其他の政府要人と會見し、事變處理に關する帝國政府の眞意を打診した結果であつて、汪の日支和平合作論の基準は東京に於て仕上げをしたものと云つてよい。

是より先き、北方に於て吳佩孚を中心とする和平問題が擡頭してゐた。卽ち一月二十四日北上中の梁鴻志と王克敏とが、吳佩孚を北京の私邸に訪問して種々協議の結果、翌廿五日和平救國會なるものを組織して吳佩孚を其綏靖委員長とし、綏靖委員會は秘書長胡毓坤を參謀長として二月一日より開封に於て執務した。右綏靖委員會は河南省の一部に於ける治安に任じたが、其後所期の目的を達したので新中央政府樹立と前後して解消した。次いで六月汪兆銘は日本よりの歸途天津北京に立寄り王克敏と會見して新政府問題の下相談を試み、なほ吳佩孚とも意志の疎通を圖つたところ、和平意見は一致したが、吳佩孚は三民主義國民黨に他迄反對のため意見纏まるに至らず、汪吳の合作成立に至らざるまゝ、十二月四日吳佩孚の死亡によつて此問題は自然消滅となつた。

斯くて汪兆銘の和平運動は愈々新中央政府樹立の段階に其運動を展開したのであるが、彼は八月二十八日から三日間、上海に於て中國國民黨第六次全國代表大會を召集し、國民黨の純正な同志と共に黨甦生の第一歩を踏み出したものである。卽ち同志と共に純正國民黨の新支那建設へと乘出したのである。

此間、蒙疆の三自治政府は從來の蒙疆聯合委員會による分治分擔制度を解消して、九月一日德王を主席とする蒙古聯合自治政府と稱する統一政府の成立式を擧行し、また帝國も八月二十八日平沼內閣總辭職、三十日阿部信行內閣が成立した。

新中央政府樹立の問題は汪兆銘の國民黨六全大會の決議による積極的活動と相俟つて、著しく進捗し、九月十九、二十日の兩日南京に於て、臨時政府行政委員長王克敏、維新政府行政院長梁鴻志、純正國民黨主席汪兆銘の三名會談の結果、新中央政府樹立の意見一致し、其母胎となるべき中央政治委員會の組織を決定し、中央政治委員を純正國民黨、臨時政府、維新政府及び各黨各派、無黨無派からも選任することゝし、其銓衡に入つた。

「備考」　此年、徐世昌（八二）吳佩孚（六八）蕭佛成（七八）陳錦濤（六九）等死亡し、抗戰、和平の兩派の爭ひに犧牲となり射殺、暗殺されたものに曾仲鳴、陳籙、李國杰、程錫庚、郁華、吳志喬、沈崧、王憲などがある。

昭和十五年　汪兆銘の新中央政權樹立運動は我國との聯繫に就ても、亦國內各方面との交涉に就ても着々進行し、殆んど結成腹案も準備が整つたので、この上は中央政治會議の委員の銓衡に其重點が

集中されてゐた折柄、從來から和平陣營中の中樞にあつて屢々日本とも往復して活躍しつゝあつた高宗武並に陶季賢の兩名は一月三日上海を脱出、二十一日突如香港大公報に「日支和平條件の内容」なるものを發表し、暴露手段による新政權樹立運動妨害の態度に出たが、之れに對し周佛海は二十三日梅思平は二十四日、汪兆銘は二十五日と、それぞれ右記事内容の捏造なる旨を新聞記者に語つて一般の誤解を拂拭した。

右の如き妨害運動により、重慶方面よりも種々なるデマ放送も宣傳されたが、新政府樹立の機運は一層活潑に展開されるばかりであつて、先づ中央政府樹立の前提たる中央政治會議の組織に關する汪兆銘、王克敏、梁鴻志の三巨頭會議は一月二十日より青島に開催されるゝことゝなつた。依つて蒙古聯合自治政府代表李守信と純正國民黨代表周佛海とが二十三日先づ會見して蒙疆地域と新中央政府の關係に就て談合し、汪兆銘側は蒙疆地域の或る程度の防共の必要を認め、蒙疆側は新中央政府に協力すべき旨を圓滿に決定して基本協定に調印を終へ、次いで二十四日より三日間三巨頭會議となり、中央政府樹立と、中央政治會議組織と、中央政府樹立後は臨時、維新兩政府は之れに合流する件等すべて意見の一致を見た。

斯くして三月二十日午前十時より南京に於て中央政治會議が開催された。出席委員次の如し。

國民黨（十名）陳公博　褚民誼　周佛海　梅思平　林柏生　丁默邨　劉郁芬　葉蓬　李聖五　曾醒

臨時政府（五名）王克敏　王揖唐　朱深　齊燮元　殷同

維新政府（五名）梁鴻志　溫宗堯　陳群　任援道　高冠吾

國家社會黨（二名）李祖虞　諸青來

中國青年黨（二名）趙毓松　張英華

蒙古聯合自治政府（二名）卓特巴札布　陳玉銘

無黨無派（四名）趙正平　楊毓珣　岑德廣　趙尊岳

なほ會議オブサーヴァとして武漢代表何佩瑢、廣東代表彭東原が列席した。

同會議に於ては二十日の第一日に

一、中日新關係調整方針は汪主席に全權を授け責任を以て處理せしむ

二、中央政府樹立大綱案
三、中央政府の名稱は國民政府、首都は南京、國旗は青天白日滿地紅旗と定むること
四、中央政府成立の時期は三月三十日
の四項を可決し、次いで二十一日第二日には
一、國民政府政綱案
二、中央政治委員會組織條例
三、國民政府組織法第十五條修正案
四、國民政府機構五院十四部制案
五、臨時、維新兩政府の名稱廢止並に善後法律案
を可決した。而して三月三十日南京に於て國民政府成立式を擧行し、茲に汪精衞（兆銘）を首班とする新支那中央政府が顯現されたのである。依つて帝國政府は（一月十六日米内光政内閣成立）前首相阿部信行を特命全權大使に任命して右式典に參列せしめ、事實上之れを中央政府として確認するに至つたのである。
阿部全權大使は式典後南京に留まつて引續き新中央政府との間に條約締結交渉の任に當り、迂餘曲折の後、十一月三十日日支基本條約及び日滿支共同宣言の調印を了し、茲に正式に新國民政府を承認することゝなり、次いで十二月六日本多熊太郎を新政府成立後初代の駐支大使に起用した。
新國民政府は成立後その内容充實と政治刷新に努めつゝあるが、十二月十九日中央儲備銀行法を制定し、新中央銀行として新たに法幣を發行せしめ、通貨政策の改善に一歩を乘出したが、一方重慶政權は益々窮狀に陷り、且つ我が空軍の連續爆擊に遭ひ、重慶市街は潰滅に瀕し、極度の經濟恐慌に呻吟してゐる。
「備考」元老西園寺公望公薨去（十一月二十四日）十二月五日國葬執行さる。湯爾和病歿（十一月八日）。重慶側の冀察特別戰區副司令石友三は弟石友信と前後して四、五兩日銃殺さる。十二月十三日新國民政府初代駐日大使に褚民誼任命さる。

昭和十六年　前年の日滿支共同宣言により滿支兩國相互承認の結果、一月滿洲國政府は呂榮寰を初代駐支大使に、また國民政府は廉隅を初代駐滿大使にそれぞれ任命した。二月一日南京に汪精衞（兆銘）を會長とする東亞聯盟中國總會組織され、國民政府の側面的强化を助長する東亞聯盟運動を開始したが、二月十三日韓德勤麾下の魯皖邊區遊擊隊副司令李長江は兵三萬と共に突如汪兆銘に歸順を申込み、また魯蘇皖遊擊隊第七縱隊長秦慶林も兵五千と共に歸順して來た。

以上の情勢に鑑み國民政府は其統治地域内に於ける軍事並に警察機構を整備し、地方治安の確立を推進すべく五月汪兆銘を委員長、陳公博、周佛海を副委員長とする清郷委員會を設置し、六月より楊子江下流地帶一定の地域に於て活潑なる清郷工作を開始し逐次良好なる成績を擧げてゐるが、なほ國民政府の政治力强化の問題論議さるゝに及んで、日本政府との直接會談を要望した汪精衛（兆銘）主席は六月十七日東京着、十七、十八兩日は皇室の賓客たる待遇を受け、更らに朝野各方面との接觸を終へて二十七日歸支の途についた。右訪日の結果、帝國政府は今後一層國民政府の强化育成と全面和平の實現に寄與すべく、三億圓の借款に應ずることに決し、二十八日帝國政府より

今回帝國政府は國民政府の要望に應へ、取敢ず限度三億圓の借款供與方を決定し、之が實行に就ては横濱正金銀行等に於て其衝に當ることとせり。

と發表した。七月一日獨、伊、ルーマニア、スロヴアキヤ、クロアチアの五ヶ國、國民政府を正式に承認した。

また國民政府も行政機構の改革によつて育成强化の實を擧げんことを考究した結果、八月十六日第十八次中央政治委員會に於て行政機構並に人事機構の改革を斷行し、各部の廢合を行つたが行政院新陣容は次の如くである。

行政院長　汪兆銘
外交部長　徐良
軍政部長　鮑文樾
教育部長　李聖五
實業部長　梅思平
宣傳部長　林柏生
行政院政務委員（無任所部長）
傅式說　陳君慧　李士群　趙尊岳
水利委員會委員長　諸青來　社會運動指導委員會委員長　周佛海

內政部長　陳群
財政部長　周佛海
海軍部長　任援道
司法行政部長　趙毓松
交通部長　丁默邨

一方重慶政府は依然として國民黨と共產黨との相剋激烈を極めて蔣介石は兩者の間に巧みに抗日陣營の調整に努めてゐるが、特に其英米依存外交政策は露骨を極め、外交部長に駐英大使郭泰祺を任命し、且つ米國よりの飛行機購入、飛行將校招聘等に大童となり、またビルマ、マレイ方面に於ける英蔣防備工作に夢中になつてゐる。

之れに對し百萬の皇軍は抗日政權撲滅のため南北支那四千キロの戰線に馳驅奮鬪し、敵の總反攻企

圖を畫餅に歸せしめたが、此年一月より六月までの戰果（大本營陸軍部七月五日發表）は交戰回數一萬二千餘回、交戰せる敵兵力約二百十萬九千、敵の遺棄死體實に十九萬一千七百、捕虜八萬四千七百の多數に上つてゐる。而して鹵獲品は

重、野、騎、山砲一〇一、機關砲、速射砲一八、重機關銃四二一、輕機關銃一、四九八、小銃四七二七七、自動車一六、客貨車八五、船艇七八

で、我方の戰死五千百十九名、卽ち彼我兵力の損害比率は三十七對一であるといふ。

「備考」　二月六日大角岑生海軍大將廣東より海南島に飛行途中遭難死去、三月一日西尾壽造大將に代つて畑俊六大將支那派遣軍總司令官となる。七月十六日第二次近衛內閣總辭職。十八日第三次近衛內閣成立す。十月十七日第三次近衛內閣總辭職。十八日東條內閣成立す。十二月八日米英に對し戰宣布告の大詔渙發。

補遺

本項鐵道建設の功績は日露戰役に於ける極めて重要の役目であつて且つ其仕事は攻城野戰に讓らざるものがある。曩に前篇日露戰役項下に採錄すべきに當時尙ほ其史料を得る能はず仍つて玆に補遺として追加する。

日露戰役に於ける鐵道建設事業の功績

一、緒言

日露戰役が擧國一致、將に國を賭しての決定的戰ひであつたことは今更說明するまでもない。從つて此一戰が、陸に於ても、海に於ても、必勝を期しての渾身の奮戰であり、將帥自ら陣頭に進んで全軍を指揮し、兵員又競ふて第一線に身命を擲つた忠勇美談は數知れぬほど、現に歷史の華として傳へられてゐる。

擧民一心、眞に皇國の興廢を双肩に擔當した日露戰爭は、十萬の英靈と二十億の國帑を犧牲として國家存立の生命線たる滿洲の曠野を平和に復歸するを得たのである。後世國民が、歷史を繙いて想を此處に致す時、必ずや戰史に現れた悽慘なる光景に感激を湧起し、多數先輩の身魂を捧げたる勇猛心と、尊き犧牲の血潮と、消えた英靈とに、心からなる感激を捧げずに居られぬであらう。

言ふまでもなく、日露戰爭は我が忠勇なる將兵の奮戰によつて大捷を博したのであるが、之と同時に其背後にあつて、所謂銃後の任務に聊かも搖ぎなかつた國民の擧國的至誠の一貫せるものがあつたことも亦、第一戰に身命を捧げた將兵と同樣に、日本民族の後世永く記憶せねばならぬことである。凡そ國家が戰爭に直面したる場合、前線に砲火を浴びて恐れざる勇敢忠誠な將兵を必須の要件とするは勿論であるが、同時に銃後の國民が一致戮力全的支援に熱中するだけの眞劍さがなければ決定的戰捷を贏ち得ない。日露戰役に於ける帝國の實狀は。此二つの條件を完全に持ち得たことが戰勝の最大原因であつた。

唯此處に最も注意を喚起すべきは、同じ銃後の國民として非戰鬪員でありながら、第一線に於て將兵と共に身命を砲火の前に曝し、重大なる任務を擔當した鐵道部隊の顯著なる功績の實在することである。抑も戰爭に關する叙述と言へば概ね戰史に重きを置かれ、從つて戰爭に就ての事實は略ぼ委曲を盡し得るを常とするが、第一線の軍隊を輸送したり、兵器糧食を運んだりした非戰鬪員に關する情景は動もせば簡疎になり勝ちなものである。殊に日露戰役の如き、文化の不充分なる滿洲曠野を戰場とした時の如きは、特に此銃後戰員の活動に多大の功績を認めねばならぬものがあつた。卽ち輸送部隊を東邊道よりする場合、朝鮮に於ける鐵道がなほ未完成の時代であつたり、關東州よりする場合、當時の東淸鐵道は其路線が廣軌であり、我が國の鐵道が狹軌であつた關係上、敵の遺棄した廣軌路線を利用して我が輸送機關の機能を發揮せんとせば、應急修理を必要とする。而かも軍の持つ鐵道隊は極少數で、最前線に進軍するの已むなき當時の兵力に於ては、鐵道建設修理事業は大部分之れを非戰鬪員に委囑するの外なき實情にあつた。鐵道關係の非戰鬪員が第一線に進出して、邦家のために身命を擲つて奉公したのは必然的現象である。

當時、明治三十七年二月、宣戰布告後間もなく、我が軍は取り敢へず臨時軍用鐵道監部を編成して先づ朝鮮より東邊道へ通ずる鐵道の建設に任ずることとなり、更に關東州全域占領後、同年五月大連に野戰鐵道提理部を組織して滿洲に於ける鐵道改修を行はしめたのであるが、是等臨時軍用鐵道監部野戰鐵道提理部に於ける活動狀況を瞥見する時は、鐵道關係者の涙ぐましき奮鬪振りが、第一線に於ける將兵と相呼應して、積極的に國家の運命を開拓した現實を是認せざるを得ないものがあり、其顯著なる功績も亦永く後世に貽すべき歷史的價値を藏するに充分なるものがあるのである。

二、臨時軍用鐵道監部

日露間の風雲急を告ぐるや、日本として最も取急ぎ準備を進めたのは朝鮮に於ける鐵道建設であつ

た。當時京釜鐵道會社總裁古市公威は工事長大屋權平、技師鳥越銀之助以下數名の技師を督勵して釜山、京城間の建設に當つてゐた。然るに其うちに日露開戰となつたゝめ、此工事は特に急速に進捗したが、何分にも餘りに無理な工事をやつたので、後に幾度か修理を加へた程である。

開戰最初に仁川沖でワリヤーク、コレーツを擊沈し、黑木大將の第一軍が仁川から上陸した。ところが仁川、京城間には鐵道はあつたが、京城以北には鐵道がない。參謀本部に於ても種々作戰計畫並に之に伴ふ兵站計畫を研究した結果、日本としては地形上、朝鮮を經て滿洲に連絡する交通線を確保して置くことが絕對的に必要であるといふことに結論付けられ、從つて京釜鐵道の全通と同時に京城以北の軍用鐵道敷設の急を告ぐるに至つた。依つて明治三十七年二月二十一日、臨時軍用鐵道監部の編成が命ぜられたのである。當時任命された鐵道監部の首腦部は次の如き顏觸であつた。

鐵道監	陸軍少將	山根武亮	(中將男爵)
部員	工兵少佐	渡邊兼二	(少將)
同	工兵大尉	井上亥六	(井上勝子爵嫡男戰後病死)
副官	工兵大尉	西原茂太郎	(後に少佐、中將)
同	陸軍一等主計	黑沼彥太郎	(戰時中三等主計正)
技師長		石川石代	
技師	平壤出張所長	加藤勇	
		伊藤常夫	(工兵少尉)

卽ち鐵道監山根少將は「貴官は鐵道大隊及び工兵五個大隊を指揮し京城以北鐵道の敷設に任ずべし」云々との訓令を受けたので、先づ鐵道建設の任に當るべき鐵道大隊（大隊長井上仁郎中佐）及び工兵第四大隊とを率ゐて三月上旬相前後して仁川に上陸した。京城以北の鐵道敷設と云つても最初は京城、開城間約五十哩であつたのに、其後四月には平壤迄工事を延長せよとの命令あり、更に六月には新義州まで線路を延長せよとの命令があるといふ具合で、戰爭の進行につれて建設計畫はどし〳〵變更されて行く。しかも最初の計畫では鐵道大隊の外に工兵第一、第二、第三、第四、第五、第六の五個大隊を鐵道監隷下に屬せしむる內命であつたが、實際は作戰上の都合で工兵第四大隊以外のものは總て他方に出動を命ぜられ、其代りに第一、第三、第十二師團の後備工兵を各一個中隊づゝ配屬されたが、是又二三ヶ月で旅順方面の所屬師團へ引揚げてしまふし、加ふるに肝腎の鐵道大隊及び工兵第四大隊も相前後して前線へ轉進せざるを得ない事となり、玆に於てか鐵道監部では建設事業を急速に完成するため、請負にして大に韓人の人夫を使役する方法をとり、斯くて民間鐵道方面の人々が

多數この事業に參劃するに至つた。

何分にも當時鐵道材料が不充分であつた。殊に京城から開城、開城から平壤、平壤から新義州といふやうに命令が次から次と延長されて行くので、之に伴ふ材料の配給は頗る不充分であつたばかりでなく、敷設地測量のため韓國の內地へ入り込む段になると、當時は未だ日本勝つか、露西亞勝つか不明の場合であつたから、事大思想の韓國では日本側の鐵道建設などに好意を持たず、爲に蒙つた不便の如き相當のものであつた。

鐵道監部は最初京城にあつたが、龍山を基點とし、京義線を進めるとなると龍山に本部を置くことなり、更に材料其他の都合で仁川を便利とするとなると仁川に移轉したりした。材料も內地の既設鐵道會社から强制徵發的に買收するのだが、遞信省鐵道作業局（長官平井晴二郎）技師國澤新兵衞を陸軍御用掛兼務に任じ、鐵道關係の人事及び材料の採用按配方に當らせた。國澤は志保太一郎大尉、成竹紫丸大尉などと協力し、參謀本部の高崎喜惣、濱名寬宥などと協議し、現地からの註文を引受けると、各私鐵に夫々割當てて機關車、列車、人員を採用することにし、日本鐵道其他の會社の係長との間に委員會を設けて充分協議をとげた後、鐵道作業局に於て之を取り纏め、橫濱、神戶等から荷出したものである。機械とか、レール、枕木等も買收し、機關車、貨車などは山陽鐵道から徵發して急速を旨とした。米國に註文したものも相當額に上つた。

一方現地に於ける建設事業は非常な苦慮を要した。卽ち軍隊の方は組織があり、編成材料が完備してゐるので、例へば測量班の如き奧地踏査をする時などは、軍隊は天幕を張つて夜營の準備を直ちに完設するが、鐵道從業員の方は柳行李の蓋を開けて其中に入り、頭から毛布を被つて夜を明かしたり、僅かにアンペラを繩で縛つたバラックに七、八ヶ月も暮したり、苦惱の限りを盡したが、然し何れも協力一致よく所期の目的達成に邁進した。建築班、車輛班、保線班、輕便鐵道班等々に分れて、一部分は龍山から北方へ、他の部分は新義州から南方へと測量もし、建設もしたが、龍山、新義州間三百十一哩の工程を三十七年十月には龍山、開城間、而して三十八年一月十五日には臨津江の千六百呎の鐵道橋が竣工し、三月五日には侍從武官長岡澤精、東宮侍從武官長村木雅美の御慰問使一行が此軍用鐵道龍山、開城間を乘車視察したのであつた。次いで開城、平壤間は三十八年三月上旬を以て線路だけが出來上り、大同江の二つの橋梁のうち、第一橋梁千三百餘呎は二月上旬に、第二橋梁千二百呎は三月下旬に完成し、四月三日に試運轉を行つた。この區間の擔任者は鐵道監部平壤出張所長技師加藤勇で、山根鐵道監から當時激賞されたものだといふ。最後の平壤、新義州間は平壤から新安州迄は三十八年一月下旬旣に敷設を終了したが、清川江、大寧江と新義州間は南北から作業を取急がせた

結果、四月二十八日に双方から繋がれた。併し米國へ註文したガーターが未到着のため、連絡はトロリーに依り假橋上をしてゐたが、三十九年四月三日を以て京城新義州間が完全に全通を見るに至つたのである。

本來、京義線の建設は兵站線としての意味にあつたもので、而かも露國がバルチック艦隊を遠征に出向せしめたと聞いて以來、之れが工事完成を特に取急いだ模樣である。當時大本營の方でも作戰上の要求から非常な苦心を要したところであつて、若しバルチック艦隊が現はれたら從來のやうな大連輸送は絶對不可能となり、僅かに朝鮮海峽を確保するより外に途がない、即ち後方連絡線としては最後に此線一つに集中せねばならぬのだから、それまでには朝鮮鐵道を急設する喫緊の必要に迫られてゐるわけである。だから測量隊も龍山、新義州間を幾班にも分け、南北から同時に測量もし工事もするといふやうな遣り方をしたのであつた。

ところで此工事中最も苦心を要したのは工事材料を支給することであつた。何分にも材料の不足と加ふるに船舶の不足から運輸不充分の爲め、なか〳〵必要な鐵道材料を現地に手つ取り早く支給することが出來ない。材料の配給に就ては材料課長海津工兵少佐（後任工兵少佐中山八藏）が自らライタ[1]を指揮して各材料配給個所へ乘込んだほどであつた。配給所（作業頭）は仁川、碧瀾渡（開城方面）兼二浦、何日里浦（清川、大寧兩江合流點北岸）唐浦（路下より分岐する支線終點）新義州等に設け、仁川と新義州には將校の班長を置き、其他は派出所として下士を置いて之が調辨の任に當らしめた。後日、我軍が九連城を占領した時、露軍の保管に係る木材も多數鹵獲したので、鐵道監部は右鹵獲品の中から枕木二五、〇〇〇本、挽角材五〇〇本、丸太一、〇〇〇本分與された。又新義州材料班長長谷川正五中尉は歩兵一個小隊並に輜重輸卒一隊（約五〇〇人）を配下に鴨綠江材を調達するに大に努力したが、此調材が豫想以上の驚くべき成績を擧げて、其數量の如きも、京義全線は勿論、後には安奉線の建設に充當し、更に旅順要塞攻圍中の第三軍用に供給するも尚ほ餘裕があつたといふ。同中尉は此功績に依り功五級金鵄勳章を賜つた。

鐵道監部は以上の京義線の外に、三十七年八月の命令によつて馬山浦鐵道を敷設することとなつてゐた。卽ち馬山浦、三浪津間二十五哩であるが、班長工兵中佐時尾善三郎以下敷設工事を急いだ結果洛東江の橋梁千八百呎、馬沙峠トンネルなどの難工事もあつたが三十八年五月に竣工した。

三十七年九月には京城、元山間の鐵道敷設命令が下つた。同命令に依れば京城、元山間の一部敷設であつたので、之れは京城、元山兩終點からの一部敷設に着手し、尙ほ全線建設に就ての測量を完成するにあつたのだから、元山鐵道建築班（班長工兵少佐渡邊誠一）を編成して之れが實施に任ぜしめ

た。

三十八年二月には鴨綠江鐵道橋建設に關する命令があり、富田保一郎、加藤勇などの技師が現場調査の任に當り、七月中に設計書を提出し、十月中旬其御裁可を得たのであるが、工事に着手するに至らずして鐵道監部は引揚げてしまつた。

三十八年四月、かねて臨時鐵道隊（隊長工兵中佐井上仁郎）が苦心慘憺工事を進めてゐた安東縣から奉天に至る輕便鐵道の工事を、鐵道監部が鐵道大隊から引繼ぎ、未完成部分の完成方につき命令が下つた。何分にも此輕便鐵道敷設工事は鐵道大隊がやつてゐたので拙速主義を以て進工してゐた。從つて線路の敷設の如きもトンネル無しで山へ上る。其間乘員一同は列車から降りて山の向ふ側へ徒步して行き、やがて列車が山の上を廻つて來るのを待つて再び乘車するといふやうな遣り方であつた。しかしそれでも鐵道監部が引繼いだ頃には下馬塘まで完全に開通してゐた。

鐵道監部引繼後は少數の人員ではあつたがよく線路の構築及び輸送業務を擔當したもので、鐵道監部安奉鐵道班（第一班長工兵少佐平井保平、第二班長工兵中佐渡邊誠一）を編成して其任に當らしめ、ともかくも奉天まで開通し、三十九年二月には一班に合併して工兵大佐千秋道之班長となり、後には新民屯までの輕便鐵道敷設を引受けたのであつた。

要するに鐵道監部が建設を擔當した鐵道は全長五百哩餘であつて、之れに從事した人員は概算三千七、八百人、後に安奉線引繼に際して千四、五百人を引受けたので合計五千餘人であり、而かも內地の各會社からの混成組織であつたに拘らず、山根鐵道監の統率よろしきを得て協力一致、よくその非常速急の任務を果したのであつた。山根鐵道監に就いて當時工兵大尉として副官であつた中柴末純少將は「日露戰役鐵道關係者回顧座談會」（鐵道協會主催）に於て次の如き回顧談を試みてゐる。

三十八年の秋の或る日午後四時半頃、山根鐵道監は部內の高等官一同を突如卽刻自分の室に集めて平素と全く別な極めて嚴肅莊重、而かも悲痛なる調子で次のやうなことを言はれました。卽ち、

『唯今、私は某建築班から線路工夫の某といふ者が亡くなつた（病死）ことに就いて電報を受けてゐる。この電報をよく見ると、實は亡くなつた時間は電報を發送した時よりも十二時間位前である。電報が二時間かかつて全體で十四時間かかつてゐる。專用の電信もあるのだからもつと早く報告が出來そうなものである。激戰があつた譯でもない。通信其他平時狀態にあるのに十四時間もかかつて始めて部下の死を知るといふことは何事であるか。今日、鐵道監以下線路工夫に至るまでこの鐵道に從事してゐるものは皆　陛下の御爲めに働いて居るのである。鐵道監にしろ、線路工夫にしろ、或は朝鮮人の雇人にしろ、その間に決して業務の輕重があるのではない。その

大事な職務に從事して居る者――陛下の御命じになつた職務に奉公してゐる者――が死んだと云ふことを、今や總てが著しく便利に運ばれるやうになつてゐる我が鐵道監部に於て、十四時間後に私が知るといふことでは何とも申譯がない。人命は何ものにも代へ難い。而かも斯くの如くにして他日凱旋に際會せば余等、何を以て此殉國者の父兄に見ゆることを得んや。……』

といふ意味を諄々として申されました。其時の山根中將は顏の色が變つて居られまして、涙ぐまれて、一寸私には形容出來ませんが最も眞面目なる悲愴なる態度で、眞情をこめて申されました。高級部員牧野大佐及び石川技師長も居られましたが、その瞬間皆非常に感銘されまして、此時の如く鐵道監の意圖が十分全員に徹底したことは前後なかつたやうに思ひます。殊に私は始めからその事に關係して居りましたから、其場合一種の感に打たれました。

以上のやうな精神が鐵道監部全體の心を支配してゐたので、京義鐵道の完成、安奉鐵道の全通などがあつても、關東州方面の戰捷があつたために、實際の輸送には餘り使はなかつたけれども、全軍の志氣の上には大きな力となつたものであつた。卽ちバルチック艦隊の襲來に際しても、兵站線の確保といふことが精神上に及ぼした效果は極めて甚大なものがあつたのである。

三、野戰鐵道提理部

明治三十七年五月五日奥大將の第二軍が貔子窩に上陸、前進に前進を續けて中旬には金州、下旬には南山を占領するに至つた。この前後から占領區域に於ける敵の東淸鐵道を改修して我軍輸送線にすべき議が起り、大本營の方針に基いて、參謀本部、陸軍省、鐵道作業局、遞信省鐵道局の間に協議が進められ、斯くて五月二十五日大連に野戰鐵道提理部が設けられた。大連は露軍がこの地を放棄して旅順へ引擧ぐるに際し、市長サルフーが一物も殘さず破壞し、細かいものは全部支那人に無償賜與すべしとの命令を下して行つたので、露軍及び露國人が引擧げの際汎ゆる街工物、橋梁を破壞したので見る影もなき慘狀を呈してゐた。しかし此處を據點として軍は占領地域に於ける鐵道を修理し、橋梁を再築し、以て軍略上の輸送機關たらしめやうとの計畫を樹てたので、直ちに之れが組織に着手した當時の陸軍運輸通信長官大澤界雄中佐が野戰鐵道提理部提理に、陸軍工兵少佐武內徹が副提理となり陸軍を中心とする組織編成に取りかかつた。

然しながら、鐵道作業に關することでもあり、一方朝鮮には臨時軍用鐵道監部があり、鐵道大隊は安奉線工事に從事する等の關係から、鐵道提理部は其組織に當つて最初から民間の協力を必要とした

殊に東清鐵道のゲーヂは五呎であり、之を我方で運輸に利用するに當つては、日本から機關車以下客貨車は勿論レール等を持込まねばならず、日本の鐵道のゲーヂは三呎六吋であるから、輸送に取掛かる前に先づ路線の改修をやらねばならぬ。一切は火急を要するので日本鐵道（社長曾我祐準）山陽鐵道（社長牛場卓藏）の民間從業員を選拔して現地に送ると同時に、民間鐵道から總ての材料を供給せねばならなかつた、斯る事情の下にあつたから、提理部の組織と同時に官民一致協力して應急の措置に任じたものである。

當時の日本の鐵道は靑森から廣島迄の本線が鐵道作業局の管轄卽ち國鐵であつて、其他は日本鐵道山陽鐵道、九州鐵道、東部鐵道、北越鐵道、關西鐵道等の私鐵があつたが、鐵道作業局を中心として鐵道材料の非常動員をやつた。鐵道作業局の幹部は、

長官	平井晴二郎
汽車部長	畑精吉郎
經理部長	土師民嘉
建築部長	增田作
運輸部長心得	內藤彥介

工務部長　大屋權平

で工務部長代理に國澤新兵衞が居た。偶々鐵道提理部の編成となるや、平井長官は洋行中の技師古川阪次郎の歸朝を待つて直ちに提理部技師長に推し、提理部隊の渡滿前、戰地を視察せしむるため先發せしめた。

古川阪次郎技師長は五月二十九日、工兵大尉福井策三、鐵道技師谷直諒の兩名を同行宇品から出發鹽大澳に上陸せんとしたが、波浪のために遂に六月三日迄上陸するを得なかつた。上陸後は金州から得利寺方面の現狀を視察、直ちに材料輸送方を電請した。一方日本にあつては鐵道作業局の技師國澤新兵衞が陸軍御用掛兼野戰鐵道提理部技長取扱囑託に任ぜられて、人員、材料配給、整備の任に當り、遞信省鐵道局長山之內一次は私鐵管轄の任にあつたので、之と協力、更に作業局及び私鐵關係者を以て委員會を組織し、人員、材料の配給方を審議したのであるが、大體レールは日本鐵道から五百哩、山陽鐵道から二百五十哩、九州鐵道から二百哩、其他東部、北越、關西の各鐵道からも各種の材料を供給せしめ、最も重要な機關車、客貨車等は日本、九州、山陽の各鐵道に割振つて徵發し、尙ほ不足の分は英、米、獨の諸國へ注文を發した。

人員に就ては各鐵道會社から優秀な技術員從業員を拔擢して送ることとなり、右の材料は六月十日

鹿兒島丸に搭載して横濱出帆大連に向ひ、殘りの材料と人員は六月十四日佐渡丸によつて宇品を出帆したのである。然るに六月十五日、佐渡丸の方は常陸丸と同時に露艦リューリック號に發見され、常陸丸は沈沒、佐渡丸も亦襲擊されて多數の被害者を出した。尤も佐渡丸搭載の材料は大したものではなかつたが、人員の方は提理部の武内工兵中佐以下八百六十五名、第二臨時築城團田村工兵大佐以下三十餘名、攻城砲兵司令部佐藤砲兵中佐以下十餘名、碇泊場司令部山口工兵少佐以下百六十餘名、航海監督官小椋豫備海軍少佐以下數名、外に便乘者船員等百七十餘名、總員千二百七十四名であつて、提理部の首腦者以下の遭難は提理部の業務進行の上に多大の影響を齎らし、是等の人員及び鐵道材料は約一ヶ月遲れて七月十七日頃に現地へ到着したのであつた。

なほ提理部の職員は大澤大佐の後を享けた武内中佐（中將に進級）提理となり、任命された主なるものは次の如くである。

野戰鐵道提理部職員

野戰鐵道提理部編成當時の職員中主なるものは次の如くである。なほ其後に於て更迭されたものもあるが茲には最初任命されたものゝ中、判任待遇以上の者のみを擧ぐることとした。

提理	陸軍工兵中佐	武内徹
本部	陸軍工兵少佐	星野庄三郎
部員	陸軍工兵大尉	福井策三
	陸軍工兵大尉	靜間知次
	陸軍工兵大尉	西尾絹夫
	陸軍一等主計	今川彌吉
	陸軍三等主計	西岡延壽
	陸軍一等軍醫	牧野康二
	陸軍三等軍醫	宮澤泰次郎
技術部	技長	鐵道事務官　古川阪次郎
	庶務官	北海道廳鐵道事務官　小林源藏
	運輸課長	川口宗時
	汽車課長	鐵道技師　吉野又四郎

工務課長　鐵道技師　小城齋
材料課長　鐵道事務官　矢野亮一

運轉班

班長　兼鐵道技師　酒井佐雄
運輸長　鐵道事務官補　中村伴九郎
保線長　鐵道技師　酒井佐雄
車輛長　鐵道技師　貝瀬謹吾

建築班

班長　兼鐵道技師　古川武太郎
建築長　鐵道技師　古川武太郎
軌道長　鐵道技師　谷直諒
電信長　鐵道技師　月野正五郎

工場班

班長　村田重義

材料班

廠長　兼鐵道事務官　矢野亮一

(一)本部員

工兵曹長　坂本由三郎　工兵曹長　岩橋直男
工兵曹長　佐々木惠　一等計手　猪俣則邦
二等計手　月生田桂造　陸軍屬　松尾虎吉
陸軍通譯　小松光治　陸軍通譯　綾部德次郎
同　金田雄次　同　遠山英彦
同　山本春治　同　徐波晏

(二)技術部員

廠務官記　佐伯彪　廠附務官記　安部政夫
運輸課長附書記　金森輝夫　北海道技廳附書記　小倉治郎
雇(判任待遇)　飯田義一　汽車課長附書記　山崎秀松
技手　金萬計吾　鐵道課長附書記　村上政一

雇　松平久吉
書記　中村常次

(三)運轉班員

運轉勤務員書記　川久保倉太
同驛長　塙直義
同　井上半四郎
書記　尾崎房藏
書記助役　隅田熊次郎
書記補助役　豐高鑛次郎
同　石原忠孝
雇助役（判任待遇）　山路德松
保線勤務員書記　津田鎌三郎
技手保線手　赤尾廣吉
同　平崎鶴吉
同　羽生健吉
同　村上小源太

材料課長附書記

同　天野文造
同　井田啓作
同　首藤俊司
書記助役　渡邊武一
同　齋藤富橋
同　石橋富
同　内山五作
同　一戸恒吉
同　岸彦三郎
同

同　酒井忠誠
車輛勤務員書記　横山常道
同　八木圭輔
同　高田吉次
同　内田滿直
同　河野喜一郎
同　飯田正次

(四)建築班員

建築勤務員書記　田中三郎
同技手　井上一彦
同　高木鍵太郎
同　金光昌久
同　加藤貞次郎
軌道勤務員書記　津田元吉
同電信係　江口直二郎
同書記　松井米四郎
同技手　穗積寶麿
同　田雲三
同　堀山政一
同　谷川久吉
同　池上伊作
同　福田定吉
同　中川正造
同　梅田千之助
同　村儀忠一

同技手　河野伊太郎　同　同松本島太郎
同　同福井文之助　同　同吉田欽造
同　同眞野達雄
電信勤務員　市原忠滅
書記
同技手　都築盈則　同技手大串一太郎

（五）工場班員

書記　南虎太郎　同　金井佐喜太
同　藥袋順雄　同　山崎美一

（六）材料班員

書記　澤井俊藏　同　坂倉源一
同　濱田一雄　同　百岡啓次郎
同　木内駒太郎　同　月形一郎
同　尾崎銈太郎　同　角屋直信
同　河合邦之助　同　端山博

（註）

佐渡丸遭難のために提理部の受けた被害は搭乘者八百六十五名のうち百四十七名の死亡者を出したを見ても判明するやうに、出發當初だけに其打擊も大きかつた、死亡者のうち首腦部は運轉班長の酒井佐雄一人であつたが、捕虜となつたものは

小林源藏（庶務官）　矢野亮一（材料課長）
小城齋（工務課長）　中村伴九郎（運輸長）
津田鎌三郎（鐵道書記）　羽生健吉（鐵道技手）
金森輝夫（鐵道書記）　目賀田壽（鐵道技手）
上野信孝（雇員）　三島健三（雇員）
長崎徹哉（雇員）　林山光吉（洗濯夫）

の十二名であつたので、從つて鐵道提理部の方も首腦部に缺員が生じた、依つて之れ等を補充するために、六月十六日に直ちに第二班の組織にかかり、第二建築班長兼建築長島崎直也、軌道長山本信要以下七百餘名を以て編成し、六月廿五日下關から第一永田丸に搭乘出發し、更に第三、第四第五班と逐次人員を整へて大連へ向けた。而して技術部の幹部としては小林源藏の代りに大園榮三

郎、小城齋の代りに堀三之助、矢野亮一の代りは天藤事務官が補充されたが、提理部從業員は五班を通じて三千人を越えたものである。

さて、斯くの如くにして編成された野戰鐵道提理部は、中途にして佐渡丸遭難事件もあつたが、大部分の材料は鐵道電氣技師月野正五郎附添ひの下に鹿兒島丸で無事に大連へ輸送されたし、從業員も亦順次に派遣されて來たので、晝夜兼行、軍隊とその行を共に、鐵道の政策や破壞された橋梁の架替をしたり、後方勤務の工場班では防彈器、僞裝閉塞船用の假煙突、炊飯器等々、軍隊から色々な注文があつて之れを製作したり、殆んど作業は全く椽の下の力持の如きものばかりであつたが、しかし軍隊の行動を助成するばかりでなく、爆裂彈の機械とか、銃丸栓とか、或は手榴彈やうのものを拵へて軍の攻擊力に稗益したものも少くなかつた。勿論その間にはどし〳〵鐵道工事を進めつつあつたわけであるが、當時の列車は拙速改修に重きを置いてゐたので、例へば試運轉をするに當つて迄も貨物の運送を命ぜられる有樣であるから、總て不完備のまゝに列車を運轉したもので、極寒零下數十度になつても列車内に暖房設備などはなく、火鉢や薪を燃して暖をとつた。兵隊も貨車の窓へ紙を張つて外氣の侵入を防ぎ、武内提理や古川技長、國澤囑託なども列車内へは火を持ち込まず、毛布にくるまつて一夜を明かした位であつた。而かも總司令部からの命令は路線復舊を急ぎ、一何月何日までに工事完了せざれば軍の行動に支障を來す。」といふやうな責任を提理部に負荷せしむるといふ有樣である。しかし冬季は橋梁を築造しやうにも河水が氷結し、河底の地面が凍つて杭が打てぬ。列車を動かすにも機關車用の水が凍る。甚しきは信號を示さうとして火を點じやうにも、油が凍つて火が付かぬといふ樣な、徹底的な苦難の中に三千人の鐵道從業員は、一致協力涙ぐましき奮鬪を續けたのであつた。この隱れたる苦心は總司令部に於ても之れを正しく認識し、遼陽陷落の後、山縣參謀總長から「鐵道提理部の功績は非常に甚大なものだ」との電報を寄せたほどで、一種の感狀を受けたようなものであつた。

野戰鐵道提理部は前述の如く七月五六日頃から逐次材料も從業員も大連へ到着して來たので、占領地内の東清鐵道を改修する作業に取りかかつたが、先づ第一に旅順、柳樹屯支線並に金州附近に至る線路の改修から着手し、旅順方面は三十七年七月十八日後革鎭堡に、八月一日營城子に、同月八日には長嶺子に列車の運轉を開始し、長嶺子、旅順間は三十八年一月旅順陷落後に於て改修に着手し、同月二十四日列車運轉を開始した。

是より先き、南關嶺、金州間及び柳樹屯支線は七月二十一日に改修完成し、二十六日には運轉を開始するに至り、更に引續き八月一日普蘭店へ、十二日瓦房店へ、二十四日龍王廟まで通じ、二十五日か

らは得利寺以北の工事に着手したが、九月四日の遼陽陥落當時は手押車で負傷者を至急後送したために、この間に於て、營口、大石橋間に着手し、同線は九月十八日に開通、また一方本線の方は十一日大石橋迄、二十三日海城へ二十六日鞍山站と進み、十月二日には遼陽へ運轉が開始された。然るに又もや沙河戰の負傷者輸送のために工事が遲れ、十月二十七日に至つて煙臺へ、三十一日煙臺と煙臺炭坑間の運轉を開始した。

鐵道改修工事は戰爭と併行して出來るだけ前進部隊との連絡に努力したので、軍の進擊と殆んど同時にその占領地域に於ける路線の改修を進捗したものである。斯くして三十八年三月八日には沙河、十八日には渾河まで開通した。然るにその後渾河の鐵道橋及び蘇家屯附近の線路が敵軍のために大爆破に遭つたため、從つて改修工事も相當遲れてしまひ、奉天及び新臺子へ開通したのが四月二十四日、同月二十八日には亂石山へ、五月七日鐵嶺、六月五日開原、七月七日昌圖へと運轉區域が前進した。又撫順支線の方は四月三日に李二十寨へ、五月十三日に千金寨へ通じ、八月一日に漸く撫順へ延長されたのである。然るに我方は大連から昌圖まで三百二十哩を運轉し、露國側は四平街以北の東清鐵道を管理する時に至つてこゝに日露休戰の議が起つたので、昌圖、四平街間三十三哩のレールを取り去り、この個所を緩衝地帶としたまま兩軍相對峙し、此間ポーツマス媾和條約の成立を見たのであつた。

日露媾和條約の結果、日本は寬城子以南の東清鐵道を露國から讓り受けることとなつたので、三十八年十月三十日四平街停車場に於て我が方の滿洲軍參謀福島安正少將と露國滿洲軍參謀次長オラノフスキー少將と會見「日露兩軍滿洲撤兵手續及び鐵道線路引渡順序議定書」を締約調印したが、右議定書のうち鐵道に關する分は「第二條」に左の二項を明記して締約するところあつた。

議定されたる鐵道引渡順序

一、鐵道線路引渡シノタメ兩締約國ノ各一方ハ軍事交通部將校及技師ヨリ成ル三名ノ委員ヲ任命ス。右委員ハ新曆千九百六年四月中旬ニ其ノ業務ヲ開始スベク、其ノ會合ノ場所及時日ハ別ニ協定スベシ。

二、公主嶺停車場ノ南方ニ於ケル鐵道線路ノ引渡及受領ハ千九百六年六月一日（五月十九日）以前ニ於テ、又公主嶺停車場及其北ニ於ケル線路ノ引渡及受領ハ千九百六年八月一日（七月十九日）以前ニ於テ終了スベキモノトス。

日本ニ引渡スベキ鐵道ノ最北點ヲ精確ニ定ムルコトハ外交上ノ交渉ニ讓ル。

右議定書に基いて日露兩國は左の委員を任命した、即ち

日本側

日本軍委員長　陸軍少將　中村愛三

同委員　陸軍砲兵中佐　木下宇三郎

同　監時鐵道提理部工務課長　堀三之助

露國側

露國軍委員長　陸軍少將　ドウイツチ

同委員　東清鐵道副社長技師公爵　ヒルコフ

であるが、是等兩國委員は三十九年四月廿一日、西沙河停車場に於て第一次會見を行ひ、第一期に受渡する線路は昌圖府の北十五哩八の地點なる隻廟子停車場より公主嶺に至る約五十哩の區間とする事を決定し、更に廿五日第二次會見を行ひ協議の結果廿七日大要次の如き八ヶ條の協約書を交換した。

一、第一期受領線を便宜上二回に分ち五月十一日迄に四平街以南を、五月三十一日迄に公主嶺以南を受領すること、

二、八月三十一日迄に公主嶺以北寬城子區分點地迄の第二期線を受領すること

三、四平街駐在の守備兵駐屯地以南の道路修繕工事を起すことは今日以後日本の隨意たるべきこと

四、右工事掩護の守備兵を配置するも日本の隨意たるべきこと

斯くて第一期線は豫定通り六月一日完全に我有に歸し、第二期線は八月一日其手續を完了した。

野戰鐵道提理部管轄の鐵道は軍事輸送に當つてゐたが、媾和條約締結後は還送輸送に支障なき限り三十八年十月廿一日より奉天以南の公衆輸送を開始し、更に十一月廿五日には之を昌圖迄延長し、三十九年一月四日からは一般人民の便乘及び配送貨物の取扱を開始した。而して提理部が三十八年十二月十九日還送輸送結了後、其所管線内に殘置並に新設した停車場は次の三十九であつた。

本線……大連、南關嶺、大房身、金州、三十里堡、普蘭店、瓦房店、得利寺、萬家嶺、熊岳城、蓋平、大石橋、海城、湯岡子、鞍山站、煙臺、蘇家屯、奉天、虎石臺、新臺子、鐵嶺、開原、昌圖隻廟子、四平街、郭家店、公主嶺、范家屯、寬城子

營口支線……營口

撫順支線……千金寨、撫順

旅順支線……營城子、旅順

柳樹屯支線……柳樹屯

鐵道引渡に就ては寬城子の分岐點を決定するため、委員長中村愛三少將は公使館一等書記官萩原守

一と共に寛城子に乗込み、露國側委員との間に外交交渉を開始したが、特に專門委員として露國側の專門家たるヒルコフ公爵と折衝するために提理部から出向いたものは古川阪次郎技長及び第二建築班長島崎直也であつた。而して鐵道の受渡しは昌圖、四平街間の三十三哩は徒歩を以て連絡し、我が受領委員一行二十五名、提理部からは第四建築班長藤根壽吉、鐵道技手恩田夏次郎、同山田東吉郎等參加した。第一回は昌圖、沙河子間八哩、第二回は四平街、公主嶺間三十三哩、公主嶺以北は露軍の列車に我が鐵道看守兵數十名に護られて委員一行が搭乘北進したが、沿線到る處にある看守小屋に到着する毎に受渡を行ふ。その光景たるや實に悲壯の感に打たれたもので、露兵は寢臺や炊事具やさては犬までも抱へて列車に乘込むに反し、我軍は堂々喇叭を吹奏して隊伍を整へて入城する。唯沿線墓地の所在地に達すると、露國委員長ドウィチ少將以下何れも小走りに墓地の傍へ馳せ寄り、跪座して戰友の靈に袂別禮拜する情景に至つては、流石に我方は列車の窓を閉ぢて、此悲慘な敗將の行動を見ぬやうにしたといふ。

斯くて野戰鐵道提理部は成立以來約二ヶ年間、隱れたる甚大なる効績を歴史に貽して、明治四十年三月三十一日大連西公園に於て解散式を擧行し、その事業は一切之れを四月一日から新設された南滿洲鐵道株式會社に引繼いだのである。尙ほ事業引繼により提理部より滿鐵へ引繼がれた判任官以上の職員は二百四十六名であつた。

四、佐渡丸遭難略記

明治三十七年六月十五日、佐渡丸遭難記を略記することが、野戰鐵道提理部の苦心の一端を窺はれるので玆には其概略を記錄することにした。

運送船常陸丸及び佐渡丸は六月十四日夕刻六時頃相前後して宇品出帆、鹽大澳に向つた。當時我が海軍の主力は東鄕司令長官統率の下に旅順封鎖に任じてゐたので、日本海方面の警備は專ら上村第二艦隊の任としてゐたが、偶々露國浦鹽艦隊の出沒する情報があり、必ずしも安全を期し難く思はれても居た。しかし運送船の航行に對しては曩に金州丸事件もあり旁々、水雷艇の警護を受けることもあつたが、領海近くに於ける敵艦襲擊の如きは敢て豫想することもなかつたほどである。

さて、常陸丸の方は須知中佐の指揮する後備近衞聯隊を輸送し、佐渡丸の方は若干の鐵道材料と野戰鐵道提理部提理工兵中佐武内徹以下提理部員八百六十五名を主とし、前述の如き總乘船員一千二百七十四名であつて、輸送指揮官は最上級者の故を以て陸軍工兵大佐田村義一、航海監督官は豫備海軍少佐小椋元吉であつたが、其大部分は非戰鬪員であつた。

佐渡丸は日本郵船會社所屬船で六千二百二十六噸、長さ四五五呎余、幅四七呎、吃水三〇呎、速水一六浬、二本マストで、救急設備としては汽艇二、端艇一一、和船一五を搭載しあり、船長ジョージ・アンダーソン、機關長ウヰリアム・ケー・マイケル、一等運轉士ジョン・ウヰリアム・ウオリング等の最高船員は何れも英國人で、一等機關士、事務長以下日本人船員は、一四二名であつた。首腦船員を外國人に仰いだ當時の我が航海術の幼稚さが暴露されてゐる。

宇品を出發した常陸、佐渡の兩船は、一夜を明けて十五日午前七時には下關海峽から六連島沖を通過した。玄海灘へ出た頃には佐渡丸の船脚早く、先發の常陸丸は指呼の間に見ゆるまでの距離に追ひすがつてゐた。朝食の後野戰提理部の主腦部は所定の會議を開き、或は部員を集め衞生上の注意を與へやうと相談するやら、或は望遠鏡によつて前航する常陸丸の動向を見てゐた。當日空は曇り、海上に濃霧こめて遠距離の展望不可能の情景にあつたが、突然常陸丸が方面を轉じて逆航を始めた。佐渡丸乘員は不思議に思つて先方を凝視すると、遙か前方から黑煙濛々と白波を蹴立てゝ猛進し來る三隻の船影を認めた。四本マストの正しく露國軍艦であることを認識した刹那、敵艦から轟然たる砲聲一發天に響くを覺えた。時に午前九時五十五分、續いて二發、三發、數十發を續けさまに浴せかけられてしまつた。

逃ぐる常陸丸は「敵艦見ゆ」の信號を掲げたが、常陸丸の信號が佐渡丸側に諒解される頃には逸早く敵艦三隻は肉眼にもそれを判るまで激進してゐた時である。敵の三隻は浦鹽艦隊ベゾブラゾフ中將麾下のリューリック、ロシア及びグロムボイエの最新鋭三裝甲巡洋艦であつた。

茲に於てか航海監督官小椋海軍少佐は、輸送指揮官田村工兵大佐と協議の結果、善後處置につき乘船中の高等官一同を集めて審議することになつたが、敵艦は益〻近接し來り、射擊を續けながら「停船せよ」の信號を發した。よつて詮方なく停船の處置をとり、さて一同を食堂に集めて緊急會議を開いた。小椋監督官、田村輸送指揮官以下、野戰鐵道提理部の武內工兵中佐、同少佐星野庄三郎、攻城砲兵司令部の砲兵中佐佐藤鋼次郎等二十餘名の高等官が鳩首協議たが、議論百出して甲論乙駁或は我が方から敵艦に衝突せしめて、其間に敵艦へ乘り移つて切り死にしやうといふ者、或は爆藥を裝塡して自沈しやうといふ者などあつて、議容易に纏らぬ、而かも船內はこの突發事件のため大混亂を極めてゐた。此の時、提理部の庶務課長小林源藏が文官を代表して『本船には八百有餘の鐵道員便乘し居るが、右は何れも優秀なる者を選拔して來たので、之れを亡ふは戰局の前途に重大なる影響を齎すこととなる。よつて是等非戰鬪員の安全を計ることを第一義とせられたい』と發言し、武內中佐之に贊成『此際爲し得る限り非戰鬪員の安全を圖り、次で武官は其本分に依つて所決すること』に漸く議一

決し、一同杯を擧げて　天皇陛下の萬歳を三唱散會した。其結果直ちに輸送指揮官は非戰鬪員の退船準備に着手せしめ、小椋監督官も亦一方に於ては端艇を下すやう命じ、同時に水兵三名に秘密圖書の燒却方を命令した。

一方敵艦からは「端艇を下ろせ」の信號あり、續いて「成るべく速かに船を見捨てよ」との信號が來る。何分にも餘りの突發事件のため、訓練のない非戰鬪員の周章狼狽振りは驚くべく、その混亂は名狀すべくもない。或者は悲憤慷慨して何事か大聲叱咤しながら船中を馳せめぐり、或者は沈悴落膽の餘り蒼白となり、或者は腰を拔かして動かない、又或者は眞裸となり鉢卷をして海中へ飛込まんとする。勿論船員の指揮も秩序もあつたものでなく、醜態の限りを盡し、殆んど之れを取纏める途はなかつた。あわてふためいて端艇を下すもの、空氣枕を幾つも體へ卷き付けるもの、筩筒の曳出しを持ち出して抱きつくもの、ブイに體をつけるもの、或一名のものは決然自刄してゐたことを後に至つて發見したやうな有樣である。

小椋監督官は非戰鬪員救出に關して敵と交渉する爲め、同船してゐた梅田潔を通譯として同伴、傳馬船で敵船へ赴いたが、この傳馬船に同船したもの、小林源藏、小城齋以下三十六名である。かくて敵艦に於て小椋少佐から『佐渡丸の乘員は非戰鬪員ばかりであるから船を捕獲して浦鹽へ連れて行げ』と談じ込んだが、敵艦の方でも『敵の領海深く入つて危險であるから佐渡丸を浦鹽へ捕獲することなど到底出來ぬ、若干の猶豫を與へるから速かに船を去れ』と主張して讓らぬ、そこで小椋少佐は『然らば二時間の猶豫を與へよ』と迫つたが、敵艦長も容易に長時間の猶豫を與へやうとはせず、最初のうちは一時間位いと云つてゐたが、終には『四十分の猶豫を與へるから乘員は速かに船を去れ、其後は直ちに擊沈すべし』と云ふ。茲に於て小椋監督も事態已むを得ざるものと見做し、本船に引返してその處置を命じようとすると、敵艦長は小椋監督、梅田、小林、小城等七名を抑留して歸船を肯ぜず、其他の者をして本船に四十分間猶豫の旨を傳達せしむることを命じた。依つて七名を敵艦に殘して二十九名は再び傳馬船で佐渡丸に引返したが、丈漕行餘りに遲々としてゐるので小椋監督官は氣が氣でなく、又もや敵艦長に對し『傳馬船の速度が遲いから自ら本船に赴いて四十分の猶豫を傳達すべきを以て端艇を下して欲しい』と要求し、且つ四十分の猶豫期間は右端艇が佐渡丸へ到着して後から起算すべきを極力要請したところ、敵艦長も其主張を容認して端艇を下させたが、しかし小椋少佐の歸船は認許せず、別に露國海軍少佐一名に水兵を附して佐渡丸に派遣することゝなつた。

是より先き敵艦から引返した我が傳馬船は十時半頃になつて佐渡丸に歸來し、『佐渡丸内にある將校は全部敵艦に來れ、其他は全部船を去れ、船は四十分後擊沈すべし』との敵艦長の要求を、小椋監

督官から傳達を命ぜられた旨を述べたものである。既に萬事休すと見るや、船内一同の動搖混亂は更に激烈を極めたが、右傳馬船は是等の傳令の任を終るや直ちに避難のため本船を離れたが、後に捕鯨船萬吉丸に救はれ六連島へ到着してゐる。それは後日の事であるが、一方露國將校を乘せた敵艦の端艇は、佐渡丸内に於ける非戰鬪員の實狀を臨檢し、且つ在船將校を連行せんがために間もなく到着露國將校は武裝せる二名の水兵を隨へて佐渡丸へ上つて來た。

船内は又もや騷擾を極め、乘船して來た露國將校を見るや『軍使を斬つて終へ』とか、『軍使を抑留しやう』とかざわめいたが、しかし、軍使に對しては佐藤中佐と星野少佐とが獨逸語を以て應對することとなつた。敵の軍使は先づ『今より四十分間以内に非戰鬪員を退去せしめ、軍人は總て我艦に來るべし、時刻到れば遲滯なく爆沈すべし』との敵艦長よりの命令を宣した。之れに對し佐藤、星野兩名は『本船は大部分非戰鬪員なるを以て、此儘本船を浦鹽まで曳航されたい、若しそれが不可能ならば非戰鬪員の退船時間を延長せよ』と要求したが、軍使は『遺憾ながら我艦隊は敵中深く侵入し極めて危險なるが故に日本側の提案は何れも容認できない』と明確に答へ、更に『將校諸子は余の端艇にて我が方に來艦されたし』と勸告した。之れに對しては佐藤、星野兩將校は口を極めて『日本帝國軍人は如何なる事あり共敵の俘虜となるを非常な恥辱とする。依つて在船將校は斷然本船と運命を共にする覺悟である』と拒絶し、此會見を終つたので、敵將校は其端艇に陸軍三等軍醫宮澤泰次郎、非戰鬪員十四名、船員八名及び英人船員四名合計二十七名を收容して歸艦して了つた。即ち今は唯、四十分後には爆沈さるゝ必然の運命に置かれた佐渡丸なのである。

終に最後の幕に押し詰められた。既に外人船長以下高級船員等は敵の端艇に便乘し、或は本職的技能を發揮して鮮かに端艇を下して逸早く本船を立ち去つた後である。千餘人の非戰鬪員等は、ただ徒らに狼狽するのみで、到底滿足に端艇や和船を引下せるものではない。ロープを無理に切斷して端艇を引下すや我れ先きに殺到するため無慘にも端艇は顚覆する。海中に拋り出された幾多の人々が船上でわめき合ふ混亂の目前で溺死の悲運に會ふといふ慘狀なのである。海上を泳ぐもの、船の破片に縋り付くもの、浮輪につかまるもの、唯溺れ行かんとする光景の露出である。之れにも增して船上の混亂は溺死に瀕するものを救助するどころの餘裕など勿論なかつたが、斯る混亂の間に異色の沈着を示したのは野戰鐵道提理部附陸軍工兵大尉靜間知次である。彼は事件突發以來極めて冷靜沈着なる言動に出で、周到の計を案じて『本船は決して沈沒しない』などと云つてゐたが、最後迄橋頭に立つて敵艦の行動を監視し、本船の被害程度を注意してゐた。彼の沈着は曾て下關の對岸から其熟練した水泳術によつて無事豐前方面に泳ぎ着いたほどで、全く水練の自信から來てゐたものらしい。

端艇や和船によつて難を避けやうとしたものにも種々な事件があつた。首尾よく救助船に發見されて沖ノ島や六連島其他の陸地に到着したものもあるが、中には名にしおふ玄海灘の荒波にもまれた小舟のことゝて、海中に振り落されて溺死したものがあつたり、溺死の直前、通りすがりの漁船に救はれたもの、十五日の一夜を玄海灘の暗に過ごし方向を失つて、茫然と再び沈沒を免れた佐渡丸まで漕ぎ戻つたものなどもあつた。或は荒波に飜弄された小舟の安全を神佛に祈願するもの、之を制止して脅迫されたもの、同胞相擁しながら死の直前まで相食むが如き醜態を演したもの數限りなかつたと云はれる。

飜つて佐渡丸本船の運命如何。——勿論、避難小舟の數に限りあり、而かも顚覆するもの、少數にて漕ぎ出すものなどあつて、難を船外に逃れたものは約半數に過ぎない。他の約半數五百五十餘名はなほ本船に殘留されてゐたが、定刻四十分間を經過するや、敵艦は些の躊躇するところなく攻擊の手段に出でた。卽ち、ロシア及びグロムボイエの二隻は旣に常陸丸を擊沈してしまつたので、附近から去り、リューリック一隻のみ後に殘つてゐたが、戀がて午前十一時三十分頃、リューリックは佐渡の右舷に廻り、かねて裝置してあつた水雷一發、佐渡の右舷中央に命中した。とその瞬間、最後の盃を重ねてゐた佐渡丸軍人其他は一齊に『萬歲』を絶叫したものである。次いでリューリックは佐渡の左舷に回つて更に水雷一發を發射した。指呼の間から水雷二發を見舞はれた佐渡丸は果して見事に擊沈されたか否か、敵艦は當然佐渡丸も常陸丸同樣の結果を見たものと信じ、舳艫相啣んで昔皇として北に去つてしまつた。

然しながら佐渡丸は幸運であつた。その被害は、左右兩舷とも中央部に命中して機關室は浸水し、船は左舷に傾斜したが、破損は四艙に止まり、沈沒にはなほ相當の時間を要するといふことであつた。そこで船脚を輕くして救助船の來るのを待つことにした。事件突發以後の狀態に就いては、小舟で避難したものもあり、漁船の航行もあるだらうし、或はわが警備水雷艇隊の巡りあふ可能性もあつたので、何とかそれまで本船の沈沒を支へることが必須のことだから、全員之れに準備を整へることゝなり、萬一の場合に備へるために船內の木材を利用して筏をつくつて救急船の代用たらしめやうとした。而して又、搭載してあつた汽艇に蒸氣を起して、幾らかのものは之れに搭乘して陸地との連絡に當ることとなり、直ちにその準備に取りかゝつた所、汽艇の一たる朝日丸の方は機關に故障が出來てゐて動かぬ。他の一たる神戸丸の方が幸ふじて蒸氣を起すことが出來た。船長黑川龍太郎は『本船に萬一のことがあつたら六百名の人命救助は身を以つて果す』と誓つて一同に元氣をつけ、一同は大聲で神佛に祈願する。佐渡丸は刻々と沈下する、玄海は益ゝ荒れ狂ふといふ悽愴なる光景を呈しつつ、

十五日は夜更に陥つたのである。

明くれば六月十六日朝である。一夜荒海を漂流してヘト〳〵になつた小艇が勿然として佐渡丸の邊りへ歸航して來た。野戰鐵道提理部の川口、古川等であり、續いて一般のボートが引返して來たが、乘員六十名、佐渡丸の今にも沈沒する姿に恐れをなして歸着を肯ぜず、その儘漕ぎ去つて、後に矢玉浦へ漂着したといふが、此時、唯一人ザンブとばかり海中に飛び込み、ボートと別れて本船へ泳ぎ着いたものがあつた。本船へ引き揚げられたのを見れば提理部汽車課長吉野又四郎であつた。車輛長貝瀬謹吾も本船のロープにぶら下つてゐるのを救ひ上げられたのであつた。更に續いて一和船及び一小艇が來たが、和船の方は矢張り佐渡丸の避難者であつたので、是又小倉方面へ漕ぎ去つて了ひ、小艇の方は常陸丸の負傷兵五十餘名の乘つたものであつた。直ちに本船に救護したが、この人々の口から初めて須知中佐の沈着なる行動が聞かされたのである。因に常陸丸難者中、生存者は百五十二名のみであつた。

斯る狀態のうちに、佐渡丸の沈下は益〻時間を切り詰めてゐたので、成るべく早急に陸地との連絡を取る必要に迫られ、茲に川人少佐は和船を下して兵數名を引率し、報告のため激浪の中を陸地に向つたが、爰に最も驚くべきことは十五日夜、船内に起つた淺猿しい醜態事である。即ち前夜愈〻本船

擊沈は時間の問題となり、木材を集めて數十の筏をつくつて萬一に備へるため奮闘してゐる際、船内一方では掠奪行爲が行はれてゐた。この生死の間に在つて船室の中から他人の洋服や靴を持ち去つたもの、甚しきは革製大型のトランクが鋭利な刄物を以て切り裂かれ、在中品が引出されてゐたことである。然るに午後に至つて、救助の方法漸く目途のつくに至るや、何時の間にか、何處からともなく紛失されてゐた軍服や靴、貴重品など、一品も殘らず元々通りに夫れ〴〵の部屋に戻されてゐたといふ始末。

さて午後二時頃に至つて可成り大きな一隻の帆船が通るのを見付けて之れを呼びとめたが、一人の軍曹はいきなり甲板から海中に飛び込んで見事その和船に泳ぎ着いた。同船は第二宮川丸（一五〇噸）と稱し、新潟から長崎へ鑛油を積んでの航行中であつたが、この思はざる重大事件に遭遇し、且つ陸軍からの命令といふことなので、積載した貨物全部を海中に捨てゝ、午後四時頃から佐渡丸殘留者五百五十餘名のうち船員其他若干を本船に殘して其大部分を第二宮川丸に移乘せしめ、尙ほ外に本船から和船二隻を下して之れに若干名を分乘せしめて、宮川丸が之を曳航し初めたのが午後六時、勿論各員の一切の荷物は本船に取り殘して身柄だけを移乘したのであるが、遭難者にとつては眞に「地獄で佛」の歡喜に燃えたことである。

然しながら、海は非常に荒れてこの曳航はなか〳〵困難であつた。曳航といふよりも漂流であつた。十七日午前二時頃、沖ノ島の東南約十三哩の地點を漂流してゐる時、左舷に救助船伊勢丸が現はれた。乘員一同歡呼の叫びを揚げたほどで、兎も角も第二宮川丸から百五十名だけを伊勢丸に移乘せしめ、同時に佐渡丸に殘してある行李のうち必要なものだけを若干伊勢丸へ收容した。午前六時に至つて水雷艇第十二號來り、間もなく救助船日の丸も來援したので、病傷者だけを第二宮川丸に殘して他は全部日の丸に收容、伊勢丸、日の丸は直ちに門司に向つた。一方第二宮川丸も佐渡丸の曳航を續け、六連島で傷病者は病院船ロセッタ丸に移乘せしめた。

門司に向つた兩船は正午頃門司到着、折柄小舟によつて各方面に避難した一行も或は漁船住吉丸に救助され、或は吳鎭守府所轄第七艇隊に收容されて門司に到着するなど、午後五時頃までに續々と上陸した。

一方端艇や和船で避難したものは十五日から十七日に至る間、玄海の荒波にもまれ、或は死亡するもの、或は九死に一生を得たものなど悲慘の限りをつくして隨所で救助されてゐる。渺茫たる海洋の眞只中で、漕ぎつく方向さへ分らぬ小舟のこと、しかも四人乘に十數名、十數名乘りに六十名といふが如き多數を乘込ませて居ることでもあり、死の直前の殺伐さは、右航しやう、左航しやうと議論が分れると鋭刀を閃めかして威嚇する方が勝ちを占め、又寒氣と疲勞とに船中に死亡するものも少くなかつた。それでも沖ノ島へ辿りついたものは八十餘名、この島の沿岸、牡蠣の多い岩角で端舟が顚覆したために提理部の酒井技師が死亡したが、しかし是等避難者八十餘名は第十五艇隊に收容せられ、竹敷要港部へ運ばれた、又門司や下關の裏海岸へ辛じて漂着したものもあつた。

一方、半ば浸水した佐渡丸は救助に來援した酒田丸、吳丸に曳かれて、十八日午後四時頃蓋井島附近に至り、更に高砂丸、第二浦賀丸に會航した。此頃酒田丸に故障が生じたので、高砂丸、第二浦賀丸に曳かれて六連島に向ふ途中、浸水更に激しく、午後六時回十分南風泊沖に於て干潮五尋の個所に乘り上げてしまつた。そこで排水處置を講じ、二十九日に至つて漸やく回航し得る程度となつたので、之れを長崎のドックに收容することとなり、三十日正午高崎丸、第二浦賀丸が曳航して七月二日長崎到着、修理の後には特務艦となつて日本海大海戰に功を立て、平和克復後は最近まで歐洲航路、孟買航路に就航したものである。

尙ほ、敵艦に收容され捕虜となつたものは浦鹽へ連行され、二十三日列車に搭乘して哈爾賓、滿洲里、チタと送られ、七月十二日トムスクへ、爾後轉々として俘虜生活を送り、明治三十八年十二月三十日露國から獨逸を經て、翌三十九年二月下旬歸國した。

而して佐渡丸遭難のために思はざる遲延を餘儀なくされた野戰鐵道提理部の仕事は一刻も猶豫ならざる事態なので、俘虜又は死亡者の補充を急ぎ、佐渡丸の姉妹船丹波丸に若干の鐵道材料と共に分乘せしめ、七月一日再出發した。今度は海上恙なく同月五日午後二時五十分大連灣へ到着、午後五時には岸壁から一同上陸し、古川技長以下先着者の出迎へを受け、愈々鐵道敷設の任務に着手するを得たのである。補充幹部の主なるものは工務課長小城齋の代りに堀三之助、酒井佐雄に代つて中村謙介技師、小松源藏に代る庶務官は大園榮二郎であつた。

紹對支回顧錄　上卷

上・下二冊揃
定價　金二拾圓

昭和十七年四月廿日印刷
昭和十七年四月廿五日發行

著作者　東京市麴町區霞ヶ關三丁目四番地
財團法人東亞同文會內
對支功勞者傳記編纂會
代表　中島眞雄

印刷兼發行者　東京市芝區芝公園十二號地ノ一
大日本教化圖書株式會社
代表　川口芳太郎
會員番號　一一六五一一番

發行所　東京市芝區芝公園十二號地ノ一
大日本教化圖書株式會社
電話　芝(43)三四三四・四〇二〇
振替口座東京一〇一〇七三番

印刷兼發行者　日本出版配給株式會社

版權所有

Return to Rm #5
War Trade Demobilization Office
Mr Hashimoto
Mr Hara #3 building